

地域美術館との連携による鑑賞教育プログラム 「総合演習」におけるワークシート制作を通して

小野文子

教育学部 内線 831-4147

oayako@shinshu-u.ac.jp

要旨

教育職員免許法により新設された教職科目である「総合演習」を、美術理論・美術史の専門科目を担当する教員として、2005（平成17）年度前期に担当した。「総合演習」では、ディスカッションやフィールドワーク等を中心として学生が主体的に課題を追求し、探求的な学びを行うことが求められている。¹専門科目を担当する教員として、通常は講義を中心としたオーソドックスな授業形態をとることが多いが、自ら学び、考えることを主体とした体験型学習の方法として、地域美術館との連携を試み、美術教育を専攻としない学生を対象に、鑑賞教育についての実習を行うことで、教育の現場において美術館を活用する可能性を模索した。本稿では、「美術館で学ぼう」というテーマで長野県信濃美術館を実習場所として行った「総合演習」について報告し、教員養成課程における鑑賞教育のあり方に関する考察を行った。²

キーワード：地域美術館との連携、鑑賞教育、総合演習

はじめに

1990年代から盛り上がりを見せた鑑賞教育については、『大学美術教育学会誌』（大学美術教育学会）や『美術教育学』（美術科教育学会）などに報告され、欧米における美術館教育について論じたものも多く見られる。欧米の大規模な美術館で行われている美術鑑賞プログラムを模範として、日本の美術館も教育普及担当の学芸員を配置して取り組むなど、鑑賞学習についての様々な取り組みが行われている。³また、平成10年に改訂された『小学校学習指導要領解説 図画工作編』では、教科の目標を「表現及び鑑賞活動を通して、つくりだすよるこびを味わうようにするとともに造形的な創造活動の基礎的な能力を育て、豊かな情操を養う」と定め、鑑賞の指導の充実のために、地域の美術館などを利用することが示唆されており、学校と美術館が連携して行う鑑賞学習の試みも増えてきた。しかしながら、このように学習指導要領で鑑賞学習の重要性が示唆されながらも、美術教育が授業時間削減のあおりをうけて、表現学習主体であるのが現実である。教育現場と美術館とのコラボレーションをすすめ、協力関係を構築することの必要性がすでに提示され、また、各地で様々な試みがなされているものの、美術館を利用しての鑑賞教育が美術館任せに行われる傾向にあることも切実な問題である。⁴

そこで、美術理論・美術史を専門とする立場から、体験型学習による探求的な学びが求められている「総合演習」において、地域美術館における実習や作品鑑賞用のワークシート作成を通して、教育の現場で美術館を活用する可能性を模索した。

受講生9名はすべて教育学部の2年生であり、本稿では、便宜上アルファベットで示す（表1）。⁵

表1 受講生一覧

記号	専攻名	分野名
A	言語教育専攻	英語教育分野
B	言語教育専攻	英語教育分野
C	言語教育専攻	国語教育分野
D	芸術教育専攻	音楽教育分野
E	芸術教育専攻	音楽教育分野
F	生活科学専攻	情報・技術分野
G	生活科学専攻	情報・技術分野
H	理数科学教育専攻	数学教育分野
I	障害児専攻	教育分野

1. 総合演習 — 「美術館で学ぼう」の授業概要

前述のように、美術理論・美術史を教える立場から、教員免許科目である「総合演習」にどのように取り組めるのかを考えた場合、社会との何らかの接点を保ちながら学ぶ方法として、地域の美術館を利用した鑑賞教育が適していると考えた。⁶そこで、「美術館で学ぼう」というテーマを設定し、教育学部のキャンパスに隣接する信濃美術館との協力体制を構築した。美術館を教育の場として利用することができることを体現してもらいたいということから、授業のねらいは「社会における美術館の役割と教育普及について学ぶ」とした。

美術館での具体的な実習は全て長野県信濃美術館東山魁夷館（「やねうら美術館講座」を除く）で行い、1. 美術館見学と教育普及を中心とした事業概要についての学習、2. 小学生受け入れプログラムの見学、3. 「やねうら美術館講座」の見学と補助実習、4. 東山魁夷常設展示受け入れプログラム作成、5. 小学生受け入れプログラムの実地、を計画した。このうち、「2. 小学生受け入れプログラム見学」は、遠足で美術館を見学に来る小学生を対象に行われている30分程度の受け入れプログラムを実際に見学することを通して、「5. 小学生受け入れプログラムの実地」に備えることを考えたが、受講生の時間等との都合がつかずに、実行することができなかった。また、受け入れプログラムの実施は、最初は小学生を念頭に計画を立てたが、児童の下校時間等の様々な理由により、設定が困難であったため、中学生のクラブ活動の一環として、土曜日に長野市立東部中学校の美術部の生徒に実習の対象となっていただいた。したがって、ワークシートも小学生ではなく、中学生を対象とした質問事項に変更して作成を行った⁷。

東山魁夷館を選択した理由は、信濃美術館が教育学部の西長野キャンパスに隣接する県立美術館であり、東山魁夷のコレクションが充実していることと、画家の作品の多くが風景画であり、宗教画や神話画、寓意画といった複雑な意味合いを持つジャンルに比べると、学生がより親しみ易いと考えたからである。

2. 総合演習に関するアンケート

美術館を訪れる前に、まず受講生にアンケートを行った（2005年4月20日実施）。質問事項は以下の4項目であった（表2）。

表2 質問項目一覧

質問番号	質問内容
①	美術館にいったことがありますか。
②	①で「はい」と答えた方は、どのような美術展をご覧になりましたか。
③	総合的な学習において、どのようなかたちで美術館を活用することができるのか、あなたの考えを書いて下さい。
④	総合的な学習において、美術（図工）はどのような科目と連携が可能だと思われますか。

受講者9名のうち、2名の欠席者があったため、7名が回答した。①の質問に、美術館へ行ったことがあるのは4名 [C, D, H, I]、多分あると答えたのが1名 [F]、行ったことがないと答えたのが2名 [E, G] であった。②の美術展の内容に付いては、「近代美術」「印象派展」などがあり、「覚えていない」という回答もあったが、ジャンルとしては絵画が中心であった。③についての回答は、以下のとおりである（表3）。

表3 表2の③に対する学生の回答

「美術館へ行ったことがある」と回答した学生	
C	「絵を鑑賞するというよりも、美術館全体を鑑賞できる」 「学習の場というよりも趣味（興味）的な感じで活用できる」
D	「小学校のうちから美術館に行くのは、その時関心がなくても、その後、見た作品を学ぶ機会があったら見たという経験があるから興味を持てる場合があるように、その後の人生に何らかのよいチャンスを与える一つだと考える」
H	「美術館などにいくことで、子供たちの創造力（獨創性）が広がると思う。一方で、先生側としても単に自分の固定観念により子供の作品を評価することも見直されるのでは・・・。うまく描写できる子と不思議な考えを持って書く[描く]子、双方に普段、学校では見えない所が見られて良いと思う」
I	「美術作品を鑑賞するだけでなく、それらが作られた年代や、作者の背景を学ぶことができる」
「たぶんある」と回答した学生	
F	「美術について何か専門的に学習していき、美術館で理解を深めるような学習」
「美術館に行っていない」と回答した学生	
G	「美術館で、作品を鑑賞することをとおして、普段の授業では、教科書の中でしかふれることのできない芸術家の人たちの作品を、自分の目でみて感じるができると思う。本の中で見るだけでは、感じるできない部分も感じる事が出来ると思うし、それは社会見学のような役割も果たせると思う」
E	「作品を通して、日本を代表する芸術家について知識を深める」

④については、作品を通して歴史的背景を学ぶことができるという理由で、ほとんどの学生が「社会」と回答した。このように、最初の段階における美術館での学習の可能性や他教科との関連性についてのイメージは限られており、鑑賞、創造、美術作品や制作者といったものであった。また、生涯学習的な印象を持った学生もいた。「たぶんある」と回答した学生も、美術館における学習範囲について、美術に関する専門的なものという限定的

なイメージを持っていることが分かる。

美術館を訪れたことの無い学生の回答も、美術館を訪れたことのある学生との差異はあまりみられず、美術館での学習の可能性は、美術作品の鑑賞や、芸術家について学ぶといったものであり、美術館を訪れた経験の有無に関わらず、学生が考える美術館での学習の可能性は、全体として限られたものであった。そこで、次の週には信濃美術館へ足を運び、美術館で行っている教育普及活動について学んだ。

3. 信濃美術館見学とワークショップ参加

まず、学芸員から館内を案内され、「信濃美術館の普及活動 ～信濃美術館の活用について～」、東山魁夷館常設展のワークシートのサンプル、そして、美術館を社会科見学等で利用する場合の申し込み方法や、小・中学生は入館料が免除されることなどが説明されたプリントが配布された。信濃美術館では、平成 14 年度から「親しみのある美術館」を目指して、学校との連携により教育普及活動をすすめていること、また、美術館見学だけでなく、授業協力、総合的な学習の時間、職業体験などの活動にも関わっていることが説明された。このガイダンスを受けて学生たちは、

A：「本物の絵を初めて見た。とても感動した。美術館と学校とが連携できれば、きっと素晴らしい授業が出来ると思う。湖に映った上下の対象の絵を使えば、理科での授業に使えるかもしれない。絵をじっくり見て、そこから自分でストーリーを考えていけば、国語や社会につながるかもしれない。」

F：「子供が、美術館に来て、何かを感動し、総合的な学習の時間で調べたり、理解を深め、美術に対しさらに興味を持つようになると思う。私たちは、子供が感動するに至る導入の部分で工夫して興味を持たせるようにできればいい。」

G：「教室を飛び出して、自由な感覚で何かに接するということは素晴らしいことだと思う。」

といった感想を持った。学生は、美術館学での自分たちの心の動きを「感動」とう前向きな言葉で表現し、それを自分たちが将来教える立場となったときに授業でも伝えたいという気持ちを表した。また、美術館を訪れる前のアンケートの回答に比べて、美術館での学習を他教科と多少関連させ、より具体的になっていることが分かる。

次の週には信濃美術館が毎月第3土曜日に開催しているやねうら美術館講座の「和風でGO!」を見学、補助を行った（講師：千曲市立戸倉上山田中学校 中平千尋教諭）。ワークショップのねらいは、日本美術の典型である、相反するものの組み合わせと同じモチーフの繰り返しについて、俵屋宗達の《風神雷神図》と尾形光琳《燕子花図屏風》の構図から学び、その後に自分の体を使った表現を楽しむというものであった。参加したおよそ 20 人の小学生たちは、床に広げられた長い画用紙に思い思いのポーズで寝転び、ペンでかたどってもらった後に、ポスター・カラーを使って様々な模様を描いた。参加した児童の多くは美術に興味を持っており、大学生たちは、積極的な子供たちに圧倒されながらも、寝転んだ子供たちの体をペンでかたどったり、自分たちも寝転んだりして、一緒になって着

色していた。ある学生は、総合演習のまとめとしての感想でも、次のような言葉で、初めて体験した美術講座と、それに参加した児童の自由で伸び伸びとした姿を表現した。

G：「私は、総合演習ではじめて美術館に行きました。もっとも印象に残ったことは、やねうら美術館講座で子供と一緒に美術講座を受けたことです。風神雷神を創造して描いてみようというところで、私達学生はありきたりになってしまいがちでしたが、子供たちは、思うままの自由で力強い風神雷神を描いていました。…中略… 子供のころから、美術に触れるということは、想像力を育てるという部分でも、必要なことだと思います。」

このように、導入段階として実際に小学生たちと接し、美術作品に様々な反応を示す姿を体験することは、次週から行ったワークシート作りをより発展的な内容とするための参考になったのではないかと考える。

4. ワークシート作り

(1) ワークシート作成の手順

次に、①信濃美術館東山魁夷館を訪れ、作品を鑑賞しながら、それぞれ数枚の絵を選んで質問事項を考える作業、②それぞれが美術館で作成した質問事項を整理し、作品を2枚ずつ選んで、「鑑賞」と「学習」という側面からのディスカッション、③信濃美術館学芸員からのワークシート作成のポイントに関する助言を念頭においての再ディスカッション、という手順でワークシート用の質問事項を吟味し選択した。

①の時点では、小学4年生を実習の受け入れ対象と考えていたので、比較的単純な質問事項、例えば、「スケッチAとBの違いは何だろう」、「花はいくつ描かれているでしょう」など、作品を見ることに重点をおいた比較的単純なものも多く見られたが、②の時点では中学生の受け入れが確定したため、履修生が専攻している教科との関連性を持たせることや、「調べる」などの学習が伴うことを考慮するように促した。例えば、「この川にはどんな魚がいるでしょう」といった質問は、まずその川がどこであるのかを調べる地理の学習と結び付け、実際にその川にどのような魚が生息するのかを調べる理科の学習と関連させるような質問事項を考えることを促した。②の段階で選択した質問事項は次項の通りである(表4)。

(表4)を信濃美術館学芸員に送付して助言を求めたところ、次のような回答を得た。

1. 本物の作品をじっくり見ることが第一であるため、質問は絵をしっかりと見なければ答えられないものが好ましい。
2. 見学時間がおよそ30分と限られているため、考え込んでしまうような質問は避けたほうがよい。
3. 問は、クイズ感覚でよいが、回答を三択にするなど、短時間で答えられるものがよい。
4. ①生徒がどのように回答することが予想されるかを想定し、②生徒の答えをさらに広げてあげるための説明をどうするのか、ということまで考えて質問を作成する。美術作品なので必ずしも答えはなくてよいが、「答えがない」ということでも中学生が満足できる「会話」ができるような心構えで質問を作るとよい。

その後、最終的なディスカッションを行って質問事項を選定した後、これまで美術館で使用されているものを慣例として、美術館で図1, 2, 3, 4, 5のようなワークシートを、翌週の実習に間に合うように作成してもらった。

(2) ワークシートを作成しての学生の感想

上述①の、美術館で実際の作品を前にして質問事項を考える作業を行った後に学生に感想を書いてもらうと、C:「どういうふうにすれば、興味を持ってもらえるのか考えるのは難しかった。しかし、それを考えながら鑑賞していると、普段とは違った見方ができたように思う。」といった、児童に「興味を持ってもらう」、という視点から質問事項を考えさせた学生が目立った。また、D:「自分が小学生だったら…と考えながら作った。子供に興味を持たせるには、作品を見て想像させるのがいいのではないかと思ったが、それにはまず自分自身で想像を膨らませて話を作らなければならず、大変だった。…中略… また、子供に考えさせる質問だけではなく、見てすぐ分かる質問も加えて子供にあきらめられないように努力した。」という、想像を中心とした「思考」を取り入れながらも、子供の反射的な反応も取り入れる工夫をすることで、「関心を引く」ことを考えた学生もいた。

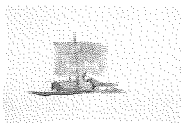
また、ある学生は G:「子供に興味を持ってもらうために、なるべく、個性がそれぞれであるような問題を作ることを心がけた。『この川にはどのような魚がすんでいるでしょう?』などという、子供のイメージが引き出せるような問題は、よさそうな気がする。また、この問題では、美術に関する知識だけでなく、どんな魚を知っているか、どんな魚が、どのような場所にいるかという、川や魚に関する知識も要求されるので、更に学習の幅が広がると思う」と、児童の学習面を考慮した。

自分自身の反省や感想を持った回答として、F:「児童に興味や関心を持ってもらうことの難しさを知った。また、自分自身がなかなか絵に関心を持つことができず、背景としてしかとらえることができず、その絵の深い意味を感じるができなかった。自分は表面的にしか理解できないのだと反省した。どうしたらその絵の意味や、こめられたメッセージなどが感じられるのか、それを教えるためにどうしたらいいのか、これから考えたい。」というのもあった。

①の段階では、学生たちは漠然と興味、関心といった視点からワークシートについてイメージしていたが、②や③のディスカッションでは、「鑑賞」と「学習」を考慮することを促したり、信濃美術館学芸員からの助言を得てからは、より具体的なディスカッションを行うことができた。例えば、「なぜ『朝』というタイトルがつけられているのだろうか?それぞれ自由に考えてみよう」(表4)は、抽象的で回答を得ることが困難な問いではあるが、「題名に焦点を当てるのは、生徒に何が描かれているのかという注意を喚起するのでテーマとしてよい」と学生は考え、タイトルを伏せておいて、生徒に思い思いにタイトルをつけさせるという問いかけに変更した。

《緑響く》(口絵参照)では、「絵の中の緑色にはたくさんの種類があります。一体何種類あるでしょうか?」(表4)という質問については、学生自身も回答することが困難と考えた。そこで、色の学習ということを考えて、カラーカードを使用して絵の中に使われている色を見つけ出し、色彩図鑑でその色の名前を学習するという案を提示した。学生からは、実際に絵の具を使用して、絵の前で色を作ってみるのも図画工作の授業としては相応

表4 質問項目一覧

タイトル	作品	質問事項
《朝》		<ul style="list-style-type: none"> なぜこの絵には「朝」というタイトルがつけられているのだろうか？ それぞれ自由に考えてみよう。 何をする船か？その人の一日を想像してみよう。
《桂林六観》		<ul style="list-style-type: none"> 船は何のために川を進んでいるのでしょうか？ この辺りに人は住んでいると思いますか？
《漓江清々》		<ul style="list-style-type: none"> 二人はどんな会話をしているか。 この絵の中の時間帯はいつ頃だと思うか（早朝、朝、ヒル、夕方、夜、深夜など）。その理由。
《沼の静寂》		<ul style="list-style-type: none"> この沼はどこにあると思うか。 この沼の深さはどれくらいあると思うか。その理由。 この沼に生き物が住んでいるとしたら、それは何だと思うか。 時間帯は？ 水との境目はどこか。沼の中には何がひそんでいそうか。 この沼は澄んでいるのか、深いのか。なぜそう考えるのか？ この絵を見てどんなおとが聞こえそうか。
《孤帆》		<ul style="list-style-type: none"> この舟が浮かんでいる川はどのような川ですか？また、どのような背景だと思えますか？実際に書いてみましょう。
《緑響く》		<ul style="list-style-type: none"> なぜこの絵には馬が描かれているのでしょうか。またあなたがこの馬だったらこの絵の中で何を思い、何をしますか？ あなたはこの絵に何という題名をつけますか？ 絵の中の緑色にはたくさんの種類があります。一体何種類あるのでしょうか？ この絵を見ているときに流れていそうな音楽はどんなものがいでしょうか？
《みづうみ》		<ul style="list-style-type: none"> この東山魁夷館の“水辺の風景”では多くの作品で水面に反射して映ったものがあります。しかし、水面に反射するにはいくつかの条件が必要です。天候・水の透明度・見る角度や距離などが関係すると推測できます。これらの条件をもとに作品鑑賞し、その作品はどんな状況であったか考えてみましょう。例えば、天候：暗れた日のPM2時ぐらい、水深：とても深い、水の透明度：割と透明度が高い、角度：岸と同じ高さから3m程高いところ、距離：60cmくらい岸から離れている
《静唱》		<ul style="list-style-type: none"> どこの国の風景か？ 時間帯は？また何故そう感じたか。 遠近感をだすためにどのような工夫がされているか。 遠くから舟がこの川を進んでくる様子を絵に描いて見て下さい。 実際生えている木と水に映っている木とでどのような違いがあるか、180度回転させたら何か変化するか。 この絵から、この場所はどんな様子が伺えますか？天候・温度・時刻など、思いつくことを書いて下さい。 スケッチや下書きと比べてどんな所が変わっただろうか？ 地面に立っている木と水面に映っている木をよく見て比べると、何がちがいますか。筆の動きをたどってみましょう。 東山魁夷は、なぜこの絵に『静唱』という名前をつけたのでしょうか？ 『唱』とは唱えるという意味ですが、この絵の中に“音”を感じることはできますか？それはどんな“音”または“声”ですか。
《山峡の月》		<ul style="list-style-type: none"> あなたはこの舟に乗っています。どんな気分で何を考えていますか。

しいという意見がでた。しかし、美術館では鉛筆以外の筆記用具は使用が禁止されているため、やはりカラーカードを使っての色彩に関する学習とすることとした。

5. 中学生受け入れプログラムの実地

中学生（長野市立東部中学校の美術部 1～3 年生）受け入れの実地は、2 度に渡って行うことにし、初回には大学生 4 人と中学生 15 人、第 2 回目には大学生 5 人と中学生 11 名で行った。初回、第 2 回とも 2 つのグループに分けた。ワークシートは、それぞれ参加した学生が考えたものを使用し、第 1 回目は《弧帆》（1976 年）（図 4）と《静唱》（1981 年）（口絵・図 5 参照）を一グループ 30 分ずつで行った。第 2 回目は《緑響く》（1982 年）（口絵・図 3 参照）と《沼の静寂》（1983 年）（口絵・図 2 参照）を各 30 分ずつで行った。

参加した中学生のほとんどは、このように美術館でワークシートを使用して作品を鑑賞するのは初めてということで、大変な興味を示し、熱心に回答を行った。生徒たちは、《静唱》の「実際生えている木と水に映っている木はどのような違いがあるかな？180 度回転させたらどう変わるかな？」（図 5）という質問に答えるために様々な工夫を行った。作品はモノクロでワークシートに印刷されているにも関わらず、生徒たちは、ワークシートを 180 度回転させることはほとんどなかった。絵の前に立って体を曲げたり、足の間から作品を見たり、絵の前に置いてあるベンチ型のソファシートに仰向けに寝そべったりと、それぞれに工夫をした。絵の前で逆立ちをする生徒もいた。このような生徒たちの工夫する姿から、ワークシートを使用することで、「本物の作品をじっくり見る」という、絵画鑑賞において最も基本的であり、重要な目標を達成することが出来たと考える。

「この舟が浮かんでいる川はどのような川ですか？また、どのような背景だと思いますか？ワークシートに書いてみましょう。」という《弧帆》（図 4）についての質問に対する生徒の回答は、学年により偏りが認められた。3 年生の多くは、背景に何も描かずに、「最初は何かがある様で無い様な、淋しい感じがしたけれど、次に、何も無い様で、どこへも行ける感じがしました」と述べ、そのように感じた理由を「いろんな世界を旅しているから。背景が一つじゃないと思いました。何もないからどこへでも行ける感じ・・・。」（3 年生）とあった。また、「広い川で心細いような・・・心理的な面を表しているように感じました。なので、あえて何も描きたくない、と。」という理由で、何も描かない生徒もおり、画家の意図を尊重しようとする姿勢もみられた。

同じ問いに対して、2 年生はイラスト的な感覚で、様々なものを描きこんだ生徒が多数おり、「閉じ込められている船を想像しました。ここはどこだろうって思いますよね。ここは・・・温泉です！！上から降ってきた船は、この異界の境目にある魔物（monster!）があったまる温泉でございます。ちょうど間に挟まって出れない様子をかきました」と説明をつけて、自分の想像力を架空の世界を作り上げることで展開させた。2 年生はおおむねこのような傾向にあり、このようなパロディー風の仕立ては、非常にまじめに取り組み、「平和な川」、「ゆるやかな川」、「崖がある」と言って、思い思いの風景を熱心に描く 1 年生の姿と対照的であった。

《緑響く》（口絵・図 3 参照）では、「あなたはこの絵に何という名前をつけますか？」

という質問に、「鏡」,「森の自然と鏡(反射鏡)」,「鏡の自分」,「反射の湖」といった、この作品に特徴的な、森林の水面への反射に多くの生徒の目があったことが分かる。また、「絵の中の緑色にはたくさんの種類があります。一体何種類あるのでしょうか?」という質問には、「6種類」,「30種類以下」,「50種類以上」と、回答にばらつきが見られた。回答後、カラーカードを使用することを促すと、生徒たちは可能な限りのカードを作品に近づけて、似た色を探していた。

大学生たちは、目を輝かせてワークシートに取り組む生徒たちの姿に刺激を受け、「こんなに熱心にしてもらえるととは思わなかった」と驚きを隠せなかった。また、自分たちの予想していた回答とは全く違ったものを見聞きすることで、大きな刺激を受けた。

ワークシートの作成と中学生の受け入れプログラムの実施を体験して、学生達は以下のような感想を述べた。

A: 私は今まで美術館は絵を鑑賞するだけの場所だと考えていました。だから、退屈な場所という先入観があり、なかなか美術館へ行く機会が設けられませんでした。しかし、今回のワークシートを使った鑑賞方法はすごく新鮮で楽しく、興味を持って見られると思いました。また、自分たちでワークシートを作ったということにもものすごく意味があると思います。私のように美術館に行ったことがあるという人は少ないと思うのでワークシートをうまく使えばもっと多くの人が美術館に行くと思います。

私はワークシート作りがものすごく楽しかったです。次は子供のほうにワークシートを作ってもらおうというのはどうだろうか。ワークシートを作るにはやはり絵をしっかり見ないといけないので、子供たちが作るのも面白いと思いました。

私は今回の授業で、今までに抱いていた美術館のイメージが一新されました。これから先生になったときも、うまく美術館や絵を利用したいです。

F: 総合演習を通して美術館に行き絵を鑑賞したり、美術館のイベントに参加することで、自分自身も絵に関心を持つこともできたり、子供たちも純粋に絵に関わって楽しんでいる様子でした。そして、個性豊かな発想とお互いの感性や思考が干渉しあわないこの時期に芸術にふれることは大変重要であると感じました。

ワークシート内に生徒に描いてもらおうと、多少友達の意見に影響される部分もあったけれど、本当に個性豊かで、私達には想像もつかないような背景が数多く描かれていました。私はこの時、子供たち一人一人独自の世界を持っていて、それを育てていくことがその子の成長と将来に大きく影響すると感じました。

学校の勉強とは違い、正解を求めるのではなく、個人の個性を尊重し伸ばしてあげることができるので、このような機会を与えてあげるとてもよいことだと思います。

今後の課題として、具体的に芸術と他の教科を結び付けて指導することができればさらに子供の芸術に対する考えもかわると思います。

学生達の感想は、明らかに最初の段階との相違が見られる。Fの学生のように「個性豊かな発想」,「感性」,「個人の個性を尊重し伸ばしていく」といった、情操面に配慮した感

想がでた。これは、冒頭でも引用した指導要領とも合致するものである。

Aのように、美術館での体験学習に自ら喜びを感じ、新しい発見をした学生や、自分達が考えた質問事項が、「作品を鑑賞する」という目的を達成することができたことに充実感を感じた学生もいた。

最終回に、初回と同じアンケートを配り、③と④について回答してもらった。③について、「D：美術館という教室以外の場所は新鮮であるし、そういった公共のマナーも知ることができる」、「B：公共の施設を使うときのマナーを学習することができる」、「C：交流の場としても活用できると感じた。」といった、美術館を公共の場であるという視点での利用を学生たちが意識したことがわかる。また、「I：ただ単に1-2時間使って何となく絵を見せるだけでは余りにも実りが少ないと改めて思う。その気さえあれば絵には様々な角度から見ることでできるものが内在していることが、生徒の皆さんの様子や他の人のワークシートから分かった。絵の中の緻密な計算や科学的な現象などをピックアップして、興味を引くことで、中学校においても、この授業と同じ様にワークシートの作成などが可能ではないかと思った。」といった、中学校における他教科の学習との関連性を持たせながら、上記に引用した学生Aと同様、生徒にワークシートを作成させることが有益であると考えたものもいた。④については、水面の反射の条件や画面構成の比率などの理数的な学習や、絵を見ながら詩を作るといった国語の学習など、総合的な学習における絵画鑑賞と他教科との関わりをより具体的に見出した。また、日本史や世界史の文化の単元で挿絵として使用されている美術作品を取り上げ、文化の特徴を学ぶことができるといった、社会科との関連を見出した。いずれも4月20日に行った初回のアンケートよりも、より具体的な回答を得ることができた。

おわりに

今回の「総合演習」では、自ら学び、考える力を養うための教科である「総合的な学習の時間」に実質的には対応するものであると考えて、美術館における体験的な学習を行った。通常は、美術史や美術理論を専門とする立場から、「鑑賞教育」といえば、じっくりと対象を学ぶために、制作者や解釈学、美術史学や文化論といった基本的な知識の伝授を中心とした講義を行う。それは、美術史を研究する立場から、好みによって知的好奇心が左右されることの無いように配慮して、客観的な事実を学生に伝えたいと考えるからである。しかし、今回の総合演習では、学生が主体的に学ぶことを中心としたため、そのようなことは一切行わなかった。

美術を専攻しない学生を対象に、ワークシート制作から受け入れプログラムの実施を半期で行うことは、時間的な制約もあったため、反省しなければならない点も多くある。アンケートでは、全体的に肯定的な回答が得られたものの、ほとんど初めて美術作品を目にする学生たちの中に戸惑いが見られたのも事実であり、以下の必要性を感じた。①ワークシート作成にあたり、ある程度美術作品の鑑賞のポイントを知識として伝える、②学生の考えた質問事項について、自ら吟味し、疑問点については調査する時間を与える、③受け入れプログラム実施後、中学生の回答についてディスカッションを行い、反省と今後の課題を考える時間を設ける。①については、作品に対する知識なくしては正しい鑑賞教育を行

うことは難しく、ワークシート作成にあたり、ある程度美術鑑賞のポイントを知識として学生に伝える必用があり、単に学生や生徒の反応の良さだけを目的としたものであってはならないと考えた。既に述べたように、今回は主体的に学ぶことを目的とした「総合演習」における地域美術館との連携を試みたものであり、「美術鑑賞」そのものを主眼としたものではなかった。今後、大学において鑑賞教育を担当する教員として、大学における鑑賞教育の充実を図るために、教育現場の現状を把握し、美術鑑賞と鑑賞教育が相互に実現するような教育方法を模索する必要があると考えている。そのためには、地域の美術館や小・中学校の教育現場との連携を試み、教育現場にフィードバックするメソッドを教員養成課程において確立することを課題として、教育・研究に取り組んでいきたいと考えている。

附記：今回の総合演習では、信濃美術館の松本猛館長をはじめ、学芸員の皆様、千曲市立戸倉上山田中学校の中平千尋先生、長野市立東部中学校美術部の皆さんと顧問の中平紀子先生にご協力いただいた。記してお礼申し上げます。

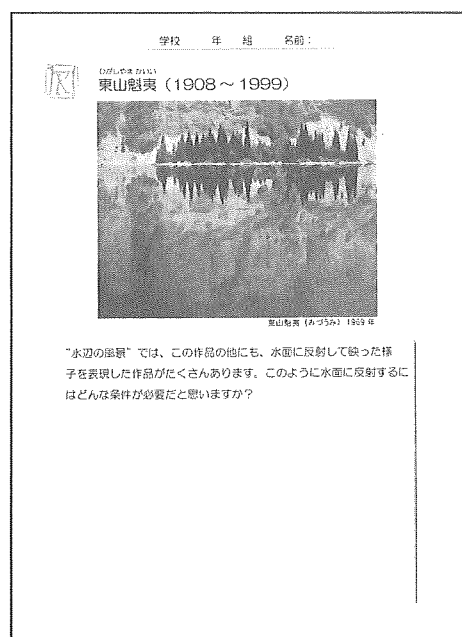


図1 東山魁夷 《みづうみ》 1969年

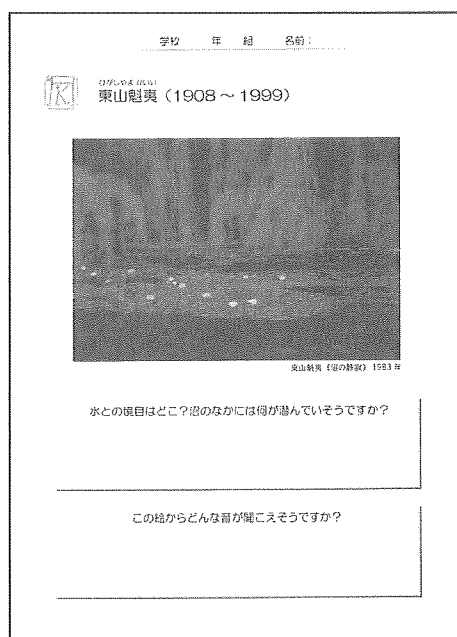


図2 東山魁夷 《沼の静寂》 1983年

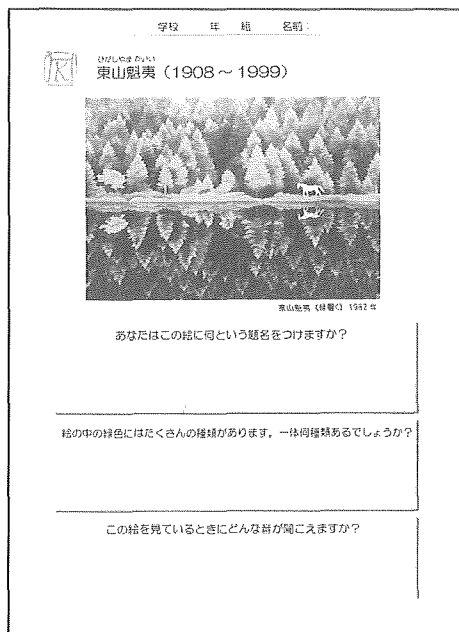


図3 東山魁夷 《緑響く》 1982年

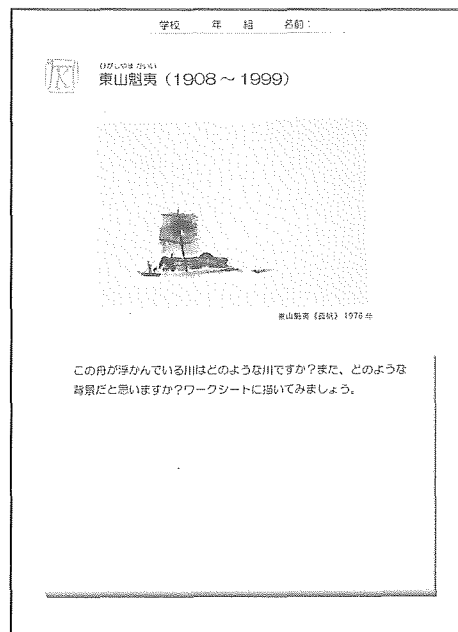


図4 東山魁夷 《孤帆》 1976年

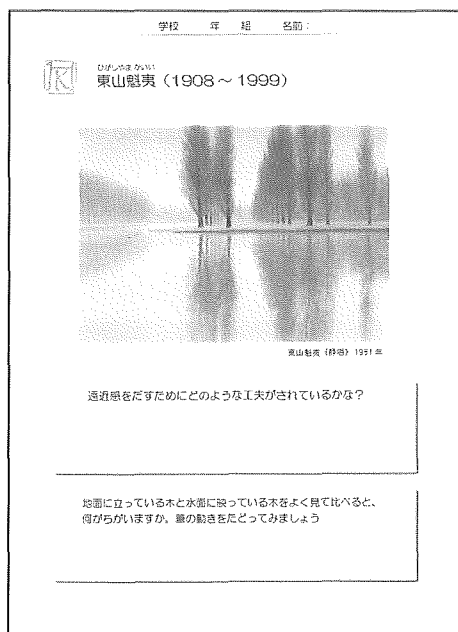


図5表 東山魁夷 《静唱》 1981年

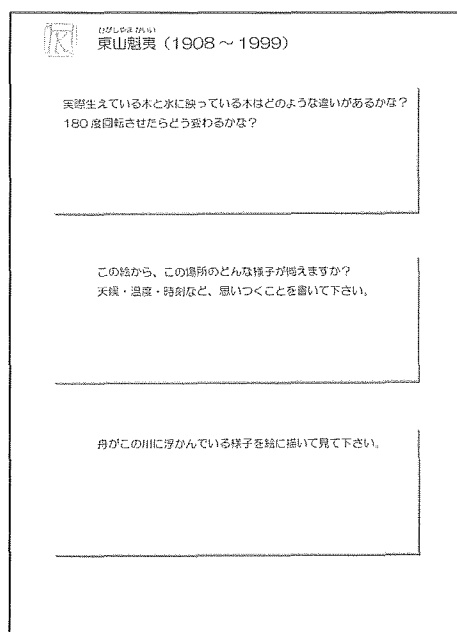


図5裏

-
- 1 伏木久始・山崎保寿・村瀬公胤「教職科目『総合演習』の授業改善に関する基礎的研究 — 信州大学教育学部における学生の授業評価の分析に着目して—」『信州大学高等教育システムセンター紀要』第1号(2005), p19 及び、総合演習ガイダンス時における配布資料参照。
 - 2 本稿は、専門科目を担当する教員として教職科目である総合演習に携わり、地域美術館との連携の下で試みた、大学における鑑賞教育の実践を報告したものである。従って、教科教育で行われるべきところの構造的なカリキュラム理論を土台として行ったものではないことは断っておかなければならない。
 - 3 『美術鑑賞宣言』、日本文京出版株式会社(2003)の第3章「学校+美術館からの発信」では、鑑賞教育に関する多くの意欲的な取り組みが報告されている。また、Web AE 芸術と教育 — Web Journal of Art and Education においても、様々な視点から鑑賞教育について論じられている。
 - 4 福本謹一、「学校教育における鑑賞学習と美術館の連携」、『現代美術館学 II 変貌する美術館』、加藤哲弘・喜多村明里・並木誠士・原久子・吉中充代編、昭和堂、2001年、pp.68-77.
 - 5 本文中のアルファベットは、学生を示す。また、学生や生徒のアンケートの記述は、明らかに誤字であることが認められる場合以外は、なるべく原文のまま記した。
 - 6 2005年4月6日に配布された総合演習のガイダンス資料では、「総合演習は『総合的な学習の時間』に対応する科目として新設されたものとは言えないが、小中高校における『総合的な学習の時間』を指導する教員の力量形成という課題と深く関連していることは言うまでもない。」と記されており、実質的には、『総合的な学習の時間』を学生が指導するようになることを想定して授業プログラムを組んだ。
 - 7 信濃美術館では、遠足で美術館を訪れる小学生を対象とした受け入れを毎年行っており、美術館の受け入れプログラムが確立されているため、信濃美術館の学芸員との話し合いの結果、本講座でも受け入れ対象を小学生と設定した。しかしながら、本文でも述べたように、様々な要因により、小学生受け入れが困難となったため、対象を中学生と設定しなおした。



《沼の静寂》



《緑響く》

東山魁夷作
長野県信濃美術館東山魁夷館蔵

(紀要論文 pp61-72 参照)



《静唱》



《みづうみ》